様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年５月５日現在

研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2007～2008
課題番号：19330198
研究課題名（和文）高度情報化社会に最適化させたリテラシーを保証する国語科授業実践創成システムの解明
研究課題名（英文）Clarification of the innovation system for language teaching practice to ensure the literacy which optimized for advanced information society

研究代表者
中村　敦雄（NAKAMURA ATSUO）
群馬大学・教育学部・准教授
研究者番号：60323325

研究成果の概要：子どもたちが高度情報化社会を生き抜いていくうえで必要なリテラシー育成を保証するための、新たな国語科授業実践創成を支えるシステムについて、以下の５類の事項に即して成果を得た。（１）母語教育における目的論や教科内容に関する研究成果。（２）母語教育カリキュラム編制の特性に関する研究成果。（３）母語教育における教材の開発・活用に関する研究成果。（４）母語教育の授業実践における評価活動の評価方法に関する研究成果。（５）母語教育の授業実践を支える教室環境に関する研究成果。

交付額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| ２００７年度 | 8,900,000 | 2,670,000 | 11,570,000 |
| ２００８年度 | 3,700,000 | 1,110,000 | 4,810,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 12,600,000 | 3,780,000 | 16,380,000 |

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教科教育学
キーワード：国語科教育、リテラシー、授業実践

１．研究開始当初の背景

現時点での国語科は、昭和 30・40 年代に構築された機能的なシステムを基調とし、そこに新たな要素を累加させて独自のシステムを維持してきた。このシステムは、高度成長期にあっては有効に機能してきた。しかし、2000 年以降実施されたＰＩＳＡ（ＯＥＣＤ生徒の学習到達度調査）に見るがごとく、現代社会の変化への適応を問う調査等に対して最適化させることがむずかしく、システムとしての精度・強度に課題を抱えていることが推測される。社会的な諸変化を射程に含めた代案が必須である。

２．研究の目的

本研究の目的は、子どもたちが高度情報化社会（知識基盤社会）を生き抜いていくうえで必要なリテラシー育成を保証するための、新たな国語科授業実践創成を支えるシステムの全体像の解明である。国際的レベルでの標準を見据えた新たな授業づくりに資する理論、ならびにその方法論の解明を目的と定めた。

３．研究の方法

研究の手段として、各国の教室で行使されている実践知・方法知に眼を向けた実地調査方法論を活用した実践的な研究を行った。アメリカ、イギリス、オーストラリア等を調査国として、現地の初等・中等学校における母語教育実践を対象とした調査研究を行った。また、現地の教育学者や教育行政担当者へのインタビューを行い、授業実践の理論的な背景の解明につとめた。

４．研究成果

以下の５類の事項に即して成果を得た。それぞれについてポイントを挙げたい。

（１）母語教育における目的論や教科内容に関する研究成果。

ＯＥＣＤが実施しているＰＩＳＡ（ＯＥＣＤ学習到達度調査）における読解リテラシー（reading literacy）の定義をはじめ、高度情報化社会（知識基盤社会）に対応させた母語教育のあり方に関して、さまざまな提案が行われている。一連の提案においては、科学技術におけるイノベーションの伸展への対応のみならず、グローバル化の浸透をも視野に含めて、多言語・多文化社会を前提とした枠組みを争点に据えている点に特徴が指摘できる。母語教育の目的論としての中核的なアイデンティティーをどこに帰属させるか、研究者や研究機関による各々の提案や具体的なナショナルカリキュラムごとに多様な視点にもとづいた試行が展開しつつある。それらに通底する争点としては、以下の４点が指摘できる。

①ＰＩＳＡやわが国の平成 20 年版学習指導要領を含めて、「社会生活」といった語が強調されているが、その具体的な内包については漠然としている。検討にあたっては、マルチリテラシーズ（multi literacies）やメディア・リテラシー（media literacy）、あるいはリーガル・リテラシー（legal literacy）といったキーワードによって、「社会生活」のどこまでを射程に含めるかを改めて問う必要が指摘できる。②「社会生活」における文化の定義をめぐって保守・革新の両極を含めた各所からの議論が拮抗している。③関連して、文化的表象が流通・機能されている各種メディアをはじめとしたさまざまな社会文化的なコミュニケーションを母語教育の教科内容として位置づける社会構成主義的な方略が内包されている。④新自由主義的教育政策下におけるアカウンタビリティへの要請にもとづき、学習活動によって期待されるアウトカムをより精緻化・明確化させた記述が行われる傾向が指摘できる。

（２）母語教育カリキュラム編制の特性に関する研究成果。

母語教育カリキュラムとしては、文化的な表象を担っている媒体として、言語のみならず映像（静止画・動画）も定位させるための領域設定が進められている。カリキュラム編制上のアプローチとしては、「見ること」「見せること」といった領域を新設することによって対応している事例や、既存の領域を維持しつつその内包を拡張している事例なども存在している。それもアウトカムベースでのカリキュラムフレームワークを提案する事例も存在しており、精緻化された評価のサイクルが枠組みの役割を担っているカリキュラム編制も構想されている。また、精緻化の一方で、プロジェクトワークのような教科の枠組みに縛られないコンテンツ優先のアプローチに対する再評価の動向も見られる。こうした事例は、母語教育カリキュラムをシステムとしてとらえた場合に、どこを中核に据えるかによる差異としても解釈できるが、国や地域ごとの教育的な価値観や文化の独自性に負う部分も少なくない。

（３）母語教育における教材の開発・活用に関する研究成果。

母語教育カリキュラムに映像が含まれたことで、教材のあり方について、新たな地平が拓かれた。その具体的な対応に関して、以下の２例が代表的である。

①短編映画等を収めた教材パッケージを刊行している事例。ＢＦＩ（英国映画協会）が作成した初等教育課程のキーステージ 1（5-7 歳）向けの『スターティング・ストーリーズ（starting stories)』、2（8-11 歳）向けの『ストーリー・ショーツ（story shorts)』、中等教育課程のキーステージ 3（12-14 歳）向けの『スクリーニング・ショーツ（screening shorts)』は世界的にもよく知られているが、学習方法の提案も含めたパッケージとして示唆に富んでいる。他にカナダにおける教科書と映像教材『スキャニング・テレビジョン』のセット、ニュージーランドにおける独自の短編映画パッケージが活用されている。②教材開発の方略を提示した教師用マニュアルも広く刊行されている。学校教育において取り上げる文化のなかに若者文化を包含させている国や地域の場合、教材パッケージの活用では不足が生じる。学習者自身によるデマンドも含めて不断の教材開発が教師側に要求されている。そうしたなかで公的・私的なデータベースの構築・活用も進められている。教材開発が積極的に進められている背後には、各種メディアテクストの教育的活用に関して、著作権の法的整備が充実している事実が指摘できる。

（４）母語教育の授業実践における評価活動の評価方法に関する研究成果。

近年、新自由主義的な教育政策の影響や余波によって、アカウンタビリティが重視され、恒常的な評価を支えるうえでのシステムの精緻化が教育改革の争点となっている。そうしたなかで、評価システムのあり方に関して、国や地域ごとに制度が規定されている。その方法として、国や地域ごとに一斉のペーパーテストを課す事例から、アウトカムベースにもとづいた教師によるパフォーマンス評価のシステムを整備する事例まで多様である。ブルーム（Bloom, B. S.）のタクソノミーの提案とも関連して派生した争点としても知られているが、数値化できる知識や技能への技術的な限定と、数値化になじまない知識や技能の擁護（あるいは、数値化そのものの意義も含め）という点で教育哲学的な議論が不可欠な状況である。

だが、現下の状況は、制度が独走している観がある。

（５）母語教育の授業実践を支える教室環境に関する研究成果。

従来教育学の研究においては、カリキュラムをはじめとしたさまざまな教育的なコンテンツと、学習場面における教師と学習者のコミュニケーションの諸相に研究の軸足が置かれてきた。教育学がかつての文献学からフィールドワークへと展開してきた現況からすると、教室環境をはじめとした「場」についての研究が次なる課題ではないだろうか。というのも、海外におけるフィールドワークを累積していったとき、教室、さらには学校がいかなる場として機能しているかが大きな鍵を握っていると考えられるからである。その内包を素描しておく。

①空間設計にもとづくアプローチからの研究。各学校の敷地利用や教室配置から、教室内での空間利用までを含めた実証的な研究。②情動的反応にもとづくアプローチからの研究。備品や掲示物等を含めた学校・教室の形状や音響・色彩・明暗などによって喚起される反応から、学習方法や形態に応じた学習者の反応までを包括させた研究。

本成果については、国内外における先行研究が少ないため、今後のいっそうの深化が課題である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１９件）


① 寺岡聖豪・赤沢早人・中村敦雄・北野幸子・小林万里子「現代的な教育課題に対応する教員養成の試みーメディア・リテラシー教育を例にしてー」日本教育大学協会研究年報，第 27 集，27-37，2009，査読有

② Atsuo NAKAMURA, Historical significance of Japanese National Curriculum 2008 in the post-war Japanese language education, Annual Research Reports of The Faculty of Education Gunma University Cultural Science Series（群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編），第 58 巻，1-9，2009，査読有

③ 藤森裕治，自己組織的な学力ー作業的・練習的学習が「自ら学び・自ら考える」に寄与するもの，日本語学，Vol.28-3，30-39，2009，査読無

④ 藤森裕治，小学校国語教科書におけるキツネの形象に関する民俗文化論的考察―なぜキツネが教科書に最も多く出現するのか―，読書科学，Vol52， No.1，印刷中，査読有，2009

⑤ 西一夫・藤森裕治，国語教科書に埋め込まれた日本文化―「雪・月・花」と季節感，国語科教育，第６５集，印刷中，査読有

⑥ 足立幸子，海外における読書指導の理論的背景―スペイン「読書へのアニマシオン」を事例として―，新潟大学教育学部紀要人文・社会科学編，第 1 巻第 2 号，99-106，2009，査読無

⑦ 中村敦雄，読解リテラシーの現代的位相ーPISA2000/2003/2006 の理論的根拠に関する一考察，国語科教育，第 64 集，27-34，2008，査読有

⑧ 藤森裕治，言語教育としての「みること」，教育研究，第 1272 号，50-51，2008，査読無

⑨ 入部明子，「学習指導要領改訂『生きる力』を具現する～『確かな学力』を考える～」，教育創造，vol.160，6-13，2008，査読無

⑩ 入部明子，社会生活とPISA，国語教室，第 88 号，32‐35，2008，査読無

⑪ 入部明子，情報を分析・評価・論述する，日本語学，vol.27-8，24-35，2008，査読無

⑫ 入部明子，裁判員に必要な国語力とは，日本語学，vol.27-8～vol.28-2（連載），査読無

⑬ 足立幸子，地域と連携した読書指導の展開―見附市立見附小学校「読書活動」の記録―，新大国語，第 32 号，左 1-33，2008，査読無，2008

⑭ 足立幸子・常木正則・堀 竜一・岡野 勉・佐藤佐敏，PISA型読解力を育成する読書指導ができる現職教員研修プログラムの開発と実践，日本教育大学協会研究年報，第 26 集，197-208，2008，査読有

⑮ 足立幸子，読書の魅力を伝える技法―リテラチャー・サークル―，教育と医学，第 56 巻 1 号，35-41，2008，査読無
⑯ 足立幸子，初等教育段階における読書力評価の国際比較， Sokutei Report，第 6 号，50-61，2007，査読無
⑰ 中村敦雄，教材としてのメディア／メディアとしての教材，日本語学，第 26 巻第 9 号，54-65，2007，査読無
⑱ 奥泉香，今なぜ『情報リテラシー』教育が必要か－多種多量の情報を，活用しやすいように分類整理・再デザインできる力を，教育科学国語教育，No.682，17-19，2007 年，査読無
⑲ 中村敦雄，リテラシーの現代化の視点からとらえた情報リテラシー，教育科学国語教育，第 682 号，14-16，2007 年，査読無

〔学会発表〕（計３件）
① 入部明子・中村敦雄・藤森裕治，知識基盤社会において国語科で保証すべきリテラシーとは，日本国語教育学会第 71 回国語教育全国大会，2008 年 8 月 5 日，筑波大学附属中学校
② 足立幸子・入部明子，2008 年国際読書学会アトランタ年次大会参加報告，日本読書学会第 52 回研究大会，2008 年 8 月 3 日，筑波大学学校教育部
③ Sachiko Adachi, Atsuo Nakamura, Akiko Iribe, Yuji Fujimori, Kaori Okuizumi, Engaging Learners in a New Literacy with the New Japanese, National Curriculum, International Reading Association, 53rd Annual Convention, May 6 2008, Georgia World Congress Center, Atlanta, Georgia

〔図書〕（計８件）
① 入部明子，その国語力で裁判員になれますか？　明治書院，133，2008
② 奥泉香，マルチリテラシーズ育成への試みーオーストラリア連邦・Qld州ニューベーシックスプロジェクトのとり組みー，国際化の中の「国語教育」（浜本純逸編著，共著），渓水社，109-121，2008
③ 足立幸子，マルチリテラシーズ教育を実現するカリキュラムの構成，新しい時代のリテラシー教育（桑原隆編，共著），東洋館出版社，166-182，2008
④ 藤森裕治，民俗文化としてのリテラシー，新しい時代のリテラシー教育（桑原隆編，共著），東洋館出版社，385-398，2008
⑤ 藤森裕治，言語活動の充実と生きる力，各教科等における言語活動の充実その方策と実践事例（高木展郎編，共著），教育開発研究所，21-23，2008
⑥ 藤森裕治，バタフライ・マップ法―文学で育てる〈美〉の論理力―，東洋館出版社，178，2007 年
⑦ 藤森裕治，教室談話を捉える，臨床国語教育を学ぶ人のために（難波博孝編著，共著），世界思想社，82-92，2007
⑧ 中村敦雄，未完のプロジェクトと呼応する教育理論，臨床国語教育を学ぶ人のために（難波博孝編著，共著），世界思想社，93-102，2007

６．研究組織
(1)研究代表者
中村　敦雄（NAKAMURA　ATSUO）
群馬大学・教育学部・准教授
研究者番号：60323325

(2)研究分担者
藤森　裕治（FUJIMORI　YUJI）
信州大学・教育学部・教授
研究者番号：00313817

石垣　明子（ISHIGAKI　AKIKO）
つくば国際大学・産業社会学部・教授
研究者番号：10265233

足立　幸子（ADACHI　SACHIKO）
新潟大学・教育人間科学部・准教授
研究者番号：30302285

奥泉　香（OKUIZUMI　KAORI）
日本体育大学・女子短期大学部・教授
研究者番号：70409829

(3)連携研究者